



ツンとお嬢さまと 花嫁修業

小説 筆祭競介
挿絵 あいのせりん

立ち読み版

序章	捨て犬と借りと幼い二人	006
第一章	幼馴染みと花嫁修業と旦那様	019
第二章	制服とケガと手コキ奉仕	045
第三章	手料理とフェラとお口にドックン	077
第四章	裸エプロンとパイズリと急な電話	109
第五章	結婚と告白と初体験	136
第六章	許嫁と初対面と新たな約束	175
第七章	子作りと猫耳とウエディングドレス	190
終章	新郎と花嫁とW結婚式	251

登場人物紹介

Characters



「嫁」の私に 命令しなさい!

らんざきま^りか
蘭咲真凜花

由緒正しい名門のご令嬢。夏休みの課題として、始を相手に「花嫁修業」のレポートをすることに。いつもはケンカばかりなのだが……?

しいな^{はじめ}

権名始

普通の学校に通う、平凡な少年。
真凜花とは幼馴染みである。

「うおっ!!」

始の目が真正銘、驚きで真ん丸に見開かれる。

目の前に現れたのは、肌の弛たるみが全くないピチピチに張り詰めた美巨乳だ。

(デケエ!)

まるでミルクが溶けたような、濃密できめ細かな白い乳肌。

その頂点でピンと立つ、小指の先ほどの雫とま色の頂点。

思春期以降で初めて目にした生バストは、今までグラビアやDVDで見てきたどの乳房よりも綺麗に見えた。

「お、おば、おっぱ……おば、おとおおおっぱ……い!」

その衝撃に一瞬で理性が吹き飛び「おっぱい」の四文字すらまともに口にできない。と呆けている始をよそに、真凛花がこちらに近づいてくる。

「ほ、ほら! ちょっとお尻上げて!」

トップレスになった恥ずかしさを誤魔化すように、少し乱暴な手つきでこちらのズボンを脱がしだした。

(うわあああ。すげえ眺め……)

その際、剥き出しになっている真凛花のバストが、タップンぷるるんと自由に弾む。

ただ柔らかいだけではなく、肌の張りのよさなのかすぐに元の形に戻ろうとするため、

その揺れ方にもキレがある。

「きゃん!? も、もう……今日はまだなんにもしてないのに、こんなにしちゃって」
だからこその始の股間はすでに熱く充血していた。

正直、裸エプロンの生尻を見た時から、ずっと似たような状態だ。

お嬢さまはコレを見るのは三度目だろうか、まだまだその反応に恥じらいが滲む。

「こ、この私がおっぱいでシテあげるんだから、感謝しなさいよね！」

それでも意を決して自ら跪き、身体を乗り出すようにして、こちらの下半身に胸を向かわせてきた。

（わわわわっ——ホ、ホントに真凛花のおっぱいに俺のチンポが!?）

たわわに実った白い丸みの間に、ビクビクとそそり立つ赤い肉棒がセットされ、始の期待がマックスにまで膨れ上がる。

対して巨乳お嬢さまは、両手で自らの胸を脇からすくうようにして——ずにゅん！
「はうううう！」

これがおっぱいの感触か！

なめらかできめ細かな肌の質感と、柔らかいのに反発力も充分に持った極上の弾力。
思えば手で触る前にいきなり男根を挟まれたのだから、その感触の衝撃は一際だ。

（それにしても……やっぱデケえ！）

己のペニスが全く見えない。左右から寄せ合わされた柔肉がむっちりと盛り上がり、その谷間に完全に埋まってしまっている。

「……え、えっと、その……」

対して真凛花は頬の赤みをさらに増し、モジッと視線を斜め下に向けた。何か言いづらいことがある表情だ。

すると彼女は暫く躊躇した後、チラッとこちらを窺ってから、

「私のおっぱいは……だ、旦那さま専用だからね。……す、好きな時にイッていいわよ」
耳の先まで真っ赤にして、再び視線を斜め下に戻す。

(……マ、マジかよ)

あのプライドが異様に高いお嬢さまが、自らご奉仕セリフを口にするとは……。

特に自分に対してはどれだけ態度は従順でも、口では憎まれ口を叩いてきたのに。

そのあまりに大きなギャップの衝撃で、彼女に丸ごと挟まれている男根がビギッと限界まで硬度を増す。

その変化は直に触れている幼馴染みも敏感に察知したようで、

「ふわっ!! いきなりビクンでした!!」

と小さく驚きの声を上げ、チラッと視線をこちらに向けてきた。

「……やっぱりこーいうセリフも……紫子さんが言ってた通り、効き目があるんだ」

「え？ なんだって？」

彼女が小声で呟いたセリフが、よく聞きとれなかったのでそう尋ねただか、

「ひ、独り言よ！ そ、それじゃあはじめのからね」

真凛花は両手で押し挟んでいる乳房を、ぎこちなく上下に揺すりだした。

「うおおおっ!! つくふああああ〜」

なめらかな乳肌にも、ずにゆずにゆと肉棒を擦られて思わず愉悅の声が漏れる。

とにかくペニスの全面に万遍なくかかる、圧力が凄まじい。

柔らかな牝肉で擦られるたびプリプリと弾けるような肉悦が、男根の形に沿って立て続けに発生する。

「お前……こんなこと、どこで覚えてきたんだよ」

これまでは自分がエッチな行為のやり方を教えてきたのに、今日は真凛花の方が主導権を握りっぱなしだ。

「パイズリぐらい知ってて当たり前でしょ」

「い、いや……そんなことはねーだろ——うおおお!!」

お嬢さまはこちらの質問を封じるように、両手の指を一杯に開いて、乳房の全質量を谷間に集中させてきた。

そして今度は左右別々のタイミングで、中の男根を扱きたててくる。

——ずにゆん、もにゆもにゆ、むにゆズりゆんっ！

胸の揺すり方のコツもわかつてきたようだ。

今ではバストを下からさしあげるようにして、捏ねるように男根を揉みこんでくる。

料理同様、性技でも、お嬢さまの飲み込みの早さは抜群だった。

「す、すげっ……むにゆむにゆって別になんにも音がしてないのに、音がしてるみたいにチンポで感じて——つくふあああ——」

過去に経験したことのない柔らかな圧迫感に、蕩けるような愉悅の声が漏れる。

（俺……今、真凛花のおっぱいに挟まれてるんだよな……）

思えば隣の御屋敷のナマイキな幼馴染みが、自分とは違う『女』だということを一番はつきりと認識したのは、彼女の胸が膨らみはじめた時だった。

自分が彼女に恋していると自覚したのも、ちょうどその頃である。

それからどんどんと大きくなり、セイ女の制服を着る頃には、すでに大人並の豊かさになっていた。

始にとつて、真凛花の胸はまさに女性の象徴そのものだった。

「この前、オカズにしようとした時と同じぐらい、今、私のおっぱいを凄い目で見てるわよ。……始のエッチ——」

その胸に、今、己のペニスが挟まれている。

肉先から根元まで、丸ごとぴっちり埋まっている。

パイズリ自体の肉体的な快感に、そんな憧憬の思いまで絡みあい、より官能が深くなる。始は言葉にならない強烈な精神の昂りで、頬までフルフルと震わせていた。

「そんなにおっぱいでズリズリされるのが気持ちいいんだ——それじゃあ」

今度は胸を左右からギュッと両手で押し挟み、膝をついたまま太腿を使って上半身ごと胸を揺すりだす。

手だけで上下させるのとは比較にならない豪快な乳肉との交わりに、始の口から「ああ、ああ」と愉悅の声が自然と漏れ出る。

(しかも、エロいのはおっぱいだけじゃないんだよな)

肉悦にけぶる瞳で彼女を見下ろすと、背中で結ばれたエプロンリボンのさらに向こうに、よく引き締まったお尻がプリプリと揺れているところまで見える。

柔らかさの塊である胸とは一味違うであろう、その引き締まった感触を想像し、無意識にゴクンと喉が鳴った。

「ねえ、始」

そんな自分の視線を引き戻したのは、幼馴染み本人の呼びかけだ。

ん？ と彼女の尻から顔に視線を戻すと、

「おっぱいに挟んだまま……オチンチン、舐めてもいい？」

「——ぶっ!!」

びっくりした。

セリフの内容も内容だが、真凜花が自分に許しを求めてきたことに一番驚いている。

始が半分魂を吹き飛ばされたような呆け顔でこっくりと頷くと、彼女は両手で胸を寄せ合わせたまま身体を大きく沈めてきた。

すると完全に埋まっていた男の先端が、まるで包茎ペニスの皮が剥けるように顔を出す。対して真凜花は首を一杯に曲げ、白い柔肉の海に浮かぶその赤い小島に、桃色の舌を伸ばしてきた。

唾液に濡れる舌先は迷うことなく先端の小穴を捉え、

「ふおおお!! ソ、ソコ……いきなりっ、ソコは——つくふああああ!」
縦溝に沿ってピチャピチャと前後に躍りだす。

まるで熱い快感の塊が尿道を逆流するように、脳天にまで突き抜けてくる。

(おっぱいのプリプリ感もたまないけど、舌のヌルヌル感もたまんねえ!)
その二つを同時に味わっているのだから、喘ぐなという方が無理な相談だ。
もちろん真凜花は舌だけではなく、胸を揺することも忘れていない。

小刻みだが、ずっとタプタプと上下させ続けている。

これまでとは比較にならないその徹底したご奉仕精神に、始は心身共に追い詰められた。

「おっぱいいろんなかれ——ンれるンちゅん……しゅつごいひくひくしれるうう」
加えて、舌責めによりまぶされた唾液は、その下で揉みくちやになっている胸の谷間に
どんどん染みていく。

結果、ただでさえなめらかだった乳肌との摩擦がさらにスムーズとなり——。

又ちゅッ、又ちゅぐゅん、ムちゅ、又ちゅん！

粘つくくも卑猥な音と共に、さらに苛烈な肉悦を中の男根にもたらず。

たわわなバスタの僅かな揺れが、肉悦の衝撃波となってペニスの芯まで響いてくる。

それに尿道を執拗に舐める牝舌も加わり、

「す、すげえ！ おっぱいと舌がつプルプルのぬるぬるでッッ——つくあ！ チンポに絡

みついてきてッッ！ くひやあああ！」

裏声に近い喘ぎ声まで漏れだした。

男根の先と胴で、全く種類の違う肉悦が幾重も弾ける。

パイズリとフェラを同時に受けているからこそその多面的な悦楽に、椅子に座る背骨ごと

全身がビクつきはじめた。

「気持ちいい？ 私のパイズリフェラが、そんな気持ちいい？」

顔を一旦上げた真凜花が、トロンと悦に満ちた瞳でこちらを見詰め、甘く囁いてくる。

頬は赤らみ眉は八の字で、半開きになった唇は甘い吐息を「はあはあ」と繰り返してい

る。一方的に奉仕しているだけなのに、まるで彼女自身を感じているようだ。

その証拠に、下腹に当たっている彼女の乳首はガチガチに硬くなっていた。

（今の真凜花って……めちゃくちゃ色っぽいんですけどおおッ！）

目に見えないピンク色のフェロモンが、全身から立ち上っているようにすら見える。そんな官能的すぎる片思い相手の艶姿に、

「うおおおおおお！」

始は椅子から立ち上がっていた。

突然のこちらの行動にも、お嬢さまはちゃんとついてくる。

驚きで目を丸くしながらも、両手でギユッと胸を寄せ合わせたまま、ペニスを乳房で挟んで放さない。

始は相手の両肩を掴んで腰を振り、これ以上なく猛った剛直をさらに激しく胸の谷間に擦りつけていく。

己の動きに合わせて豊かな乳肉がプルプルと弾み、深すぎる谷間が淫らに揺れる。

下腹や太腿感に当たると、下乳の弾力が心地よくって仕方がない。

対して真凜花は、そんなこちらの昂りきった行動も全て受け入れ自ら動かさず、それでいてバストを挟む力は緩めない。

両手で乳房をムギユツと寄せ合わせたまま、



（そーいやパイズリしてくれた時も、そんだけでハアハアしてたもんな……）

あるいは胸が性感帯なのかもしれない。

そう思うと、ますます強く念入りに初恋相手のバストを吸ってしまおう。

「んはああん！ だ、だめ！ 胸にそんなエッチな跡をつけちゃだめえええ！」

白くきめ細かな乳肌をしているだけに、キスマークがよく目立つ。

「もうお前のおっぱいは俺のモンなんだから、これはその印なんだよ——んちゅうう！」

始は特に肉厚な下乳の丸みを中心に、赤い点をつけまくった。

そうして思う存分、真凜花の巨乳を己の涎と所有印まみれにしてはうっとりとしてそれを眺め、牡の独占欲をたっぷりと満たす。

（よし。もうそろそろ次に……）

意識は自然と他の場所——彼女の下半身に向かっていった。

今まで胸を掴んで離さなかった右手をそちらに伸ばし、ミニスカートをピラつとまくると、ブラと同じ白いシルクの下着が顔を見せた。

「あつ、……そ、そこは」

胸を好きにさせていた幼馴染みが反射的にこちらの手首を掴み、どこか気弱そうな声を上げる。

彼女の顔に視線を向けると、今までに見たことがないほどその大きな瞳を官能的に潤ま

せていた。

(すんげえ色っばい！)

自分がずつと胸を責め続けた余韻に加え、恥じらいの色が顔に濃く滲みだしている。

「お前の全部……好きにしていってさつき言ってたよな？」

「そ、それはアンタがあんまり情けなかつたからで……っつゝッツ!!」

お嬢さまが顔を赤くしたまま恨めしげに見詰めてきたが、こちらと視線が合うとその瞳を迷いで揺らめかせだす。

そして僅かに悩んだ後、

「……や、優しくしないと……許さないからね」

再びプイッと横を向き、下半身を脱力させる。

「わかつてるって」

始は力みの抜けた白い膝小僧を掴むと、長い両足を左右に大きく開かせた。

そして身体ごとその股間に移動し、白いショーツを剥ぎ取るように脱がす。

「おお〜」

初めて生で見る女の秘部に、始は身を乗り出すようにして見入ってしまった。

見るからにサラサラとした金色の茂み。

肉とも皮ともつかないビラビラが左右に張り出すようにして、ぎっくりと割れた牝裂。

(こ、ここコレが真凜花のオマ○コか！)

しかもそのピラピラが半開きになっていて、内側の桃色粘膜が僅かに覗いている。やけに卑猥に見えると思つたら、そこがヌラヌラと濡れているからだ。

「ア、アソコに触るぞ！ 指で触つちやうからな！」

「……い、痛くしたら……承知しないからね」

対して真凜花は先ほどのように怒ることなく、少し硬い表情で頷いてくる。

(やっぱ、コイツも緊張してんだな)

自分も先ほどから心臓がバクバクだ。

始はごつくんと生唾を飲み込んでから、右手の人差し指でピラピラの先にチョンと触れてみた。

「ああん！」

金髪のお嬢さまはそれだけで鋭く甲高い声を上げる。

始は驚いて彼女の顔に視線を向けた。

あまりに反応が敏感すぎて、痛くしちゃったのかと思つたからだ。

対して真凜花も自分の敏感さにびっくりしているのか、先ほどまで閉じていた瞳を丸くしている。

どうやら痛かったわけではなく、純粹にめちゃくちゃ感じてしまっただけのようだ。

視線が合うと、彼女は再び耳の先まで真っ赤にして、

「べ、別に今のはアンタがいきなり触ってくるから——んはあん！」

なんだかまた言い訳めいたことを言っつきそうだったので、今度は桃色の粘膜部分を直に撫でてそれを封じる。

（もうアソコがこんなにもヌルヌルになってるし！）

その意味を想像すると嫌でも鼻息が荒くなり、指の動きも勢いを増す。

——ぬるん、ぬちゅ、ぐちよッッ、ぬるるるん！

大陰唇の内側に沿って桃色の粘膜を指の腹でなぞり、小陰唇たちをぬるみと共に何度も擦り上げる。

股間のほんの小さなエリアを責めているだけなのに、グラマーな女体が跳ねるように弓反り、ベッドを何度も軋ませる。

「……お前、ちよつと敏感すぎなんじゃね？」

「っはん、だ、だつて……か、身体が勝手にビクビクしちゃつて——んはああああん！」

濡れた牝華の中心に始の手が達し、ほんの僅かその中にヌルンと指先が埋まっただけで、真凜花は後頭部をベッドに押しつけるようにして顎を仰げ反らせた。

豊かな胸をプルつかせ、薄く浮いた腹筋をビクビク痙攣させながら、突発的に何度も腰

をくねらせる。

(それでも恥ずかしそうに首をイヤイヤつて振ってんのが、たまんねえ！)

性に敏感すぎる若い肉体と、性に恥じらう乙女の気持ちが彼女の中で交錯し、今の真凛花は牝の本性を具現化している。

「あはん！　ツツ、つくふひゃん！　ああああつ！　らめつ、らめええええええ！」
「も、もう我慢できん！」

初恋相手の——いや、両想いとなった恋人の艶姿に、牝の獣欲が振り切れる。

始は凄まじい勢いで下半身裸となり、すでにヘソにつきそうなほど剛直した己の男根を右手に掴んだ。

(真凛花とヤツチャウぞ！　俺と真凛花がシチャウんだぞ！)

うるさいほど胸をドキドキさせながら、猛りきつた肉棒を彼女の股間に差し向ける。

真凛花はハアハアと息を乱しながら潤みきつた瞳でこちらを見詰め、

「は、はじめえ……つくん！」

肉先が、アソコのピラピラにムチュツと密着すると同時に下唇を強く噛む。

何かに耐えるように背中を丸め、こちらに強くしがみついていた。

(こんな全身をビクビクさせて……めちゃくちゃ感じまくってんな)

何しろ入り口を指で触るだけで、あれだけ喘ぎ身悶えていたのだ。

——ぬぷんっ、又ぬるるるるっ。

真っ赤に充血した熱い男根を中に埋められれば、その肉悦は今までの比ではないだろう。真凛花は全身を息ませるようにして、こちらの上半身に強くしがみついていた。

それでも始の下半身は、亀頭でミチミチと肉が軋むような蜜路の震えを実感しながら、彼女の奥へと突き進んでいく。

「私の中に始があ……始の熱いのがあ——ツツはあうううう！」

完全にペニスを奥まで埋めきる前に、彼女の奥で何がパンと弾けたような衝撃が走る。

真凛花本人も弾かれたように顎を反らし、力一杯こちらの背中に爪を立ててきた。

「くおおツツ！」

その衝撃に始も奥歯をグッと噛みしめて、二人の結合部に視線を向ける。

（ほ、本当に俺が……真凛花の……）

そこには自分が初恋相手の初めての男だという証が、赤い筋となって滴り落ちていた。

「だ、だだだ大丈夫か！」

何しろことは一応、流血沙汰だ。

獣欲に茹だりきっていた己の肉体に急ストップをかけ、処女喪失したばかりの幼馴染みを氣遣う。

「だ、大丈夫に決まってるでしょ！ ……か、構わず………続けていいわよ」

真凛花がハアハアと息を乱しながら、そんな強がりを言ってくる。

しかしその美貌は明らかに強張り、セリフの後半は震えていた。

態度抜群の身体をしているだけに、処女を破られた痛みも相当大きいようだ。

始は彼女の上に覆いかぶさったまま、必死になって息を整えようとしている相手をジッと待つことにした。

「な、何よ。……続きしないの？」

「お、おう。……今動いたら、すぐにイッチまいそうだからよ」

こうでも言わないと、このプライドの高いお嬢さまは、瘦せ我慢を押し通すことだろう。

真凛花はそんなこちらの意図に気付いたようで、

「……バカあ」

と言いつつも、背中をキュッと頼もしげに抱きしめてきた。

（今、俺、本当にコイツと一つになってるんだな）

改めて実感する。

ディープスロートをして貰った時も、その粘っこい密着感がたまらなかったが、セックスの結合感はさらに上。

肉棒全面を膣壁の一枚一枚にびつちりと包まれて、キツく絞り上げられている。

「は、はじめえ……ああっ……始のが物凄くドキドキしてるのが……身体の内側から直に

伝わってきたるわよお……」

真凛花の声から破瓜の衝撃が徐々に消え、強張っていた美貌も多少は官能に甘く蕩けだしている。

「ま、真凛花あ」

そんな長年恋い焦がれてきた初恋相手の艶姿に、再び鼓動がドキドキと高鳴り、うなじの辺りがゾクゾクと粟立つ。

胸の奥底から彼女を求める精神的な昂りが、猛烈な勢いで湧き上がってくる。

「お前とキスがしてえ」

始が甘く囁くと、はあはあ、と息を整えていた恋人が感極まったように瞳を細めた。

そのままゆっくり顔を落としていくと、相手もゆっくりと瞼を閉じきり——チュッ。

二度目のキスをする。

唇と唇をしつかりと重ね、ファーストキスの時とは比較にならないほど濃く長く。

セックスの一体感も凄まじいが、キスもそれに負けていない。

始は薄目を開けて首を斜めにする、相手の唇とクロスする形にして舌を差し入れた。

唇だけではなく、味覚器官も深く重ね合おうとする。

「——ん！ んんんッ!？」

身体を繋げたままのお嬢さまが、閉じていた瞳を丸く見開いた。

それでも始は相手と超至近距離で見詰め合つたまま、さらに奥へと舌を進め——ぬるん。彼女の味覚器官を直接舐めた。

「ふんッ！」

舌先から眉間を貫くように轟いた肉悦の稲妻に驚いて、今度は始の全身がビクツと痙攣する。

舌と舌を重ねる行為は、予想を遥かに超えた快感を発生させた。

(今のスゲー気持ちいいの、もつともつと味わいてええええ！)

それは真凛花も同じようで、彼女も舌を自ら絡みつかせてくる。

——ぬるるん、んちゅううん、くちゅ、レロむちゅうううう。

丸く見開いていた瞳も今では官能に蕩け、肉片同士を重ね合わせる量に比例して細くなっている。

一度息継ぎのため「ぷふあ」と上の始がディープキスを解くと、真凛花はトロンとした視線のまま、少し物足りなさそうな顔を見せた。

そのあまりに可愛く、そして色っぽい表情に、始の背筋がゾクゾクゾクと激しく震える。「今のお前……もつとペロチューしてたいって顔してるぞ」

興奮で上擦りまくった声になってしまったが、どうしてもそう言わずにはいられなかった。



驚いて目を丸く見開くと、純白の花嫁はうっとりした蕩け顔をして、なおも深く味覚器官を伸ばしてきた。

彼女自ら始の菌茎や口蓋にレロンレロンと舌を這わせ、唾液まですすするようにむしゃぶりつけてくる。

ひたすら始と深く濃く交わることに、熱中している様子だ。

(…コイツって、エッチになると途端に従順になるんだよな)

それどころかキスをしたまま始をリードし、ベッドのある隣の部屋に導いてくれる。

今までは性的な知識が乏しいために、言いなりになっていたと思っていたのだが、どうやら本質的にそういう資質の持ち主のようだ。

普段の高飛車でナマイキな態度とのギャップが、始の猛りをより強くする。

そうして二人が巨大なダブルベッドの真横まで到達すると、始はキスをしたまま右手で相手のバストをワシ掴みにした。

胸の谷間が丸見えなこのウエディングドレス姿を目にした時から、ずっとムラムラしていたところである。

「ああんっ」

直後、積極的に舌を絡めていた真凛花の動きがヒクンと止まった。相変わらず、胸の感度は良好なようだ。

ドレスの上からでも乳首の位置はすぐにわかり、指で摘んでキュキュと擦る。

「っはああん。は、はじめえ……そ、そこ、弱くつてえ……」

敏感体質な花嫁がハアハアと息を淫らに弾ませて、こちらを見上げてくる。

「わかつてる。だから、もっとこーしてやるよ！」

始はさらに激しく胸を揉みしだくため、鼻息荒く彼女の後ろに回り込んだ。

相手の脇の下から両手を入れてドレスの胸元をズリ下ろし、剥き出しにした乳房を両手でガバツと握り締める。

これだと手首の角度が自然なまま、規格外の巨乳でもまるっと掌で受け止めることが可能だ。

（生おっぱいの手触りつて、やっぱりサイコー♪）

きめ細かでスベスベな乳肌の感触に、それだけで男心が躍る。

乳首を親指と人差し指でしっかりと摘み、そのまま両手全ての指を使って乳房全体を揉みしだく。

ウエディングドレスに包まれた肢体が、それだけでビクビクと痙攣しはじめた。

「は、始え……あはあ、ち、ちくび、ちくびらめえ」

真凛花は後頭部をこちらの肩に乗せ、顔を仰け反らせるようにして見詰めてきた。

白いドレスにベールまでしているだけに、頬の赤みがより鮮やかに映える。

瞳の潤みも相まつて、今の幼馴染みは背筋にゾクツと来るほど色っぽい。

「お、おとおつ……真凛花あ……まりかあああ！」

始はたまらず、胸を両手で鷺掴みにしたまま、上から被せるようにキスをしていた。

しかし弱点であるバストを責められ続けていても、真凛花の方が先に舌を入れてくる。

——レロんちゅ、むちゅん、ヌル、れる、むちゅゆうう。

始はすぐにその舌に、自らの舌を絡めて強く吸う。

口で、手で、真凛花の女をたっぷりと味わいながら——今度は右手を、彼女のウエストに滑らせた。

「んん……はしめえ……んんチュン——んふんツツ!!」

今までと違う部分を、いきなり触れられたからだろう。

それだけで絡めている舌がヒクンと強張る、相変わらずの敏感ぶりだ。

(細ツツ！ おっぱいはこんなにタップパなの、相変わらずスゲー細ツツ！)

ドレスで締めつけているわけではなく、彼女の身体のラインに服が合わせてあるのが、掌で軽く撫でただけでもよくわかる。

そして極上のシルク生地に無粋な突っ張りはまるでなく、むしろ彼女の肌のようになめらかだ。

「んん……っ、はじめえ……らめっ、そんなエッチな手つきで身体中を撫でまわされると

……つくふあ！」

その証拠に、ドレスの上からどこを撫でて、直に肌を責められたようなビクつき方を
する。

（前からスゲー敏感だったけど……。今のコイツってもつと敏感になってね？）

これで直接、性感帯を責めたら、いったいどんな反応を見せるのか……。

始の意識は一気に下半身に向かった。

いやらしく花嫁のウエストを撫でまわしていた手を、さらにその下に伸ばす。

たっぷりと長い純白のスカートを上到手繰り寄せるはじめると、真凛花もこちらの意図
に気付いたようだ。

「ああん……は、始え……いいよお……も、もつともつと私のこと……好きにしてえ」

濃密に舌を絡めていた顔を僅かに離し、うっとりとしおろしおろしとこちらを見上げてくる。

無論、こちらの手を止めるようなことはなく——その言葉通り、自分の猛りを心待ちに
しているように見える。

普段は全く人の言うこと聞かないくせに、

（こっちのスイッチが入ると、いきなりしおろしおろしやがって！）

その艶やかな表情にますますますますスカートを手繰り寄せる動きが早くなり、襲い掛かるよう
な勢いでショーツの中に指を潜りこませていた。

「ああん！ つふあああん！」

それだけで、今の真凜花は甲高い嬌声を絞り出す。

指先はまず柔らかな毛並みに到達していた。

何度撫でてでもサラサラしていて、自分の縮れた剛毛とは感触がまるで違う。

始は夢中でその感触を楽しんでから、

「アソコの中まで弄りまくってやるかな！」

興奮で目を血走らせながら、さらに指を下に降ろした。

「んはあん。そ、そこは一番——くふん！ び、敏感な……つつとところでえ」

言われなくてもよく知っている。

しなやかな感触のピラピラに指先が触れると、ヌルつとした感触に出迎えられた。

超敏感体質な花嫁の股間は、

「パンツの中までぐっちょちよぐちよだぞ！」

クロッチ生地まで熱く湿らせていた。

「ああん。だ、だって、しょうがないでしょ……ア、アンタの手つきがやらしすぎるんだ

から——ツひやうらん！」

牝裂の先にある小さな突起に触れると、真凜花はまるで雷にでも打たれたように、顎を

大きく仰け反らせた。

しかし初体験の時のように我を忘れて、恋人に襲い掛かるようなことはしなかった。

それどころか、滅多に見られないナマイキな幼馴染みの可愛く恥じらう姿を最大限楽しむために、始はすぐ隣にある巨大ダブルベッドに寝転んだ。

「そんなに俺が欲しいなら、自分でシテみるか？」

「ッッッッッッ!!」

真凛花が耳の先まで真っ赤になる。

さすがにこれは「調子に乗るんじゃないわよ！」と、いつものように金髪を逆立ててきてもおかしくないレベル。

「……………う、うん。わかった」

しかし純白の花嫁は、顔だけ真っ赤にしたまま従順にこっくりと頷いた。

自らスカートをたくし上げると、己の愛液で濡れ透け状態になっていたショーツをスルリと脱ぎ捨てる。

そしてハイヒールを履いたまま両膝で歩くようにベッドに乗ると、再びスカートをたくし上げてこちらの腰を自ら跨いできた。

しかし、両手でスカートを持ったまま——つまり手を使わずに男女の結合を行えるほど、彼女もセックスには慣れていない。

幼馴染みが視線で『後はシテ』と訴えかけてきたが、始は首を小さく左右に振ってそれ

を拒否。何しろ、

(こんな真凛花、滅多に見られねーだろうからな！)

始はまるで王様気分で寝転んだまま、いつもは高飛車なお嬢さまに対し、顎で自分の股間を指す。

「も、もう……調子に乗ってえー」

対して頭にダイヤと銀のティアアラを乗せた花嫁は軽く顎を引き、恨めしげな上目使いで唇を尖らせてくる。

(つたく！ その拗ねた顔まで可愛いすぎんぞ！)

真上を向いてそそり立つ男根が、ビギッと目に見えて張り詰めた。

「……こ、こんなことしてあげるの……今日だけだからね」

それだけ言うと、真凛花がスカートの裾を自らの唇で「はむっ」と啜える。

「おお!!」

白生地を啜えるその赤い顔には、夫に尽くす花嫁としての従順さと、それに負けない恥じらいが、二つ同時に現れていた。

しかも右手で硬く充血しきった肉棒を掴み、左手で自らのヴァギナをくぱあ、と開く。

「おおおおお!! こりゃ、スゲー眺めだな」

「ツツツツツ!!」

感嘆の声が止まらない、こちらの視線に耐えきれなくなったのだろう。

真凛花は官能で潤んだ瞳をソツと伏せる。

そうして彼女は慎重に腰を下ろし、牡牝の性器を近づけはじめた。

「あつツ!？」

己の亀頭が彼女の狭間に捉えられた瞬間、剛直の先が察知した熱い潤みに、思わず鋭い声を上げていた。

スカートの裾を啜えたままの花嫁も同時に「ンくっ!？」と声をどもらせる。

彼女は彼女でこちらの熱く硬い感触に、感じてしまったのだろう。

何しろ全身が性感帯だと言っても過言ではない、超敏感体質なのだ。

女性器の感度のよさは、今更言うまでもない。

真凛花は唇をフルフルと震わせたままスカートの裾を啜え、さらにゆっくりと腰を落と
しはじめた。

「っはあ……っふあああ」

対して始の口からは、まるで温泉に浸かっていくような心地よすぎる溜め息が漏れる。

何度味わつても、濡れ肉のたっぷりと詰まった穴の中に、ペニス埋まっていく挿入感
は格別だ。

上からヌルツと、熱くてドロドロした肉悦の坩堝に、飲み込まれていく。



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

竹内けん

Takenti Ken presents harem series official guide

ハーレムシリーズ

公式ガイドブック

竹内けん特別インタビュー他、
「歴史年表」「人物相関図」
等々あの超人気シリーズの
世界観を網羅した
完全ガイドが登場!!

特別描き下ろし
イラストも多数収録!



Now On Sale!!

A5判/定価990円(税込)

特設サイトはこちらからアクセス!!

<http://ktcom.jp/harem/>

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな
ハーレム系ライトノベル!

二次元
ドリーム文庫

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!
かなり過激なライトノベル!

二次元
ドリームノベルズ

サイズ:新書

※ 二次元ドリーム文庫とは異なり、美少女の方向性で書き進められる

日常に密着したエロス、リアルな
舞台設定で送る官能小説レーベル!

リアルドリーム文庫

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

あとみっく文庫

サイズ:文庫

詳しくはKTCの
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

<http://ktcom.jp/>

- ◎雑誌、コミック、小説の通信販売もやってるよ! **11月発売!**
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルのバックナンバーも買えるよ!
- ◎ジャンル別で作品も選べて超便利!
- ◎二次元編集部のおいしいBlogも更新中!

Valkyrie



<http://www.comic- Valkyrie.com/>

cranberry



<http://www.cran-berry.com/>

mille-feuille
ミルフィーユ



<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元
ドリーム**



<http://www.2d-dream.jp/>



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!